一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

飼い猫がどうも食アレルギーだったらしい。大きな三角耳の周りの、ふさふさした毛が抜け落ち、血とリンパがじくじくにじんでいる。痛がゆいのだろう、しきりに後ろ足で掻いている。猫のＱＯＬ*が下がっているのもわかるし、気の毒すぎて、見ている私たち同居人のＱＯＬも下がる。獣医さんと話して、食物除去試験をしてみましょうということになった。

ところがこれが結構大変なのだ。総合食のドライフード、アレルギー源と思われる鶏肉なしを探したが、大抵のものには鶏由来のものが入っている。もともと虚弱体質の猫ではあったので、キャットフードについても調べながら給餌していたから、キャットフード「界隈*」については知ったつもりになっていた。甘かった。その「界隈」の奥深さたるや、すさまじい。

A

猫が健康であるとはどういうことか。そのためにふさわしい食事とは何か。この問いに答えるために、医科学・栄養学上のデータはもちろん重要で、ペットフードの説明書きにもさまざまなエビデンス*が並ぶ。それらのデータを生み出し、まとめている強力な視角*の一つは、生物学的な特徴を踏まえた「猫という種らしさ」の追求である。すなわち、「猫という種らしさ」を追求してこそ、猫の正しい健康さも追求できる、というものだ。

ハンティングが上手で、犬のように雑食性ではなく、純粋な肉食動物である。この「猫という種らしさ」を踏まえた上で考えれば、野生であれば食べただろうものに食をできるだけ近づけ、なおかつ医科学・栄養学的にさらなる生の充実を支援するものであるべきだ。そのような考えのもと、グレインフリー*、人間の食用と同等のクオリティの家畜肉や養殖サーモン、野ウサギや鹿肉などの狩猟肉、ローカルな漁場でとれた野生魚などが良い原材料として選ばれる。ペレット状ではなく、フリーズドライにした肉や冷凍生肉など、餌の形態にこだわったものもある。こうして、種としての「猫という存在」をつくる食のかたちが探索され、商品化されているのだ。同時に「猫なるもの」という概念もまた、純粋化されながら再生産されている。

B

材料や加工法にこだわったキャットフードはプレミアムフードと呼ばれ、値段も高い。また、どうしても商品になる過程で一般化されているから、より目の前の個体にあった食のかたちを模索する人は、猫のために自炊をする。わたしはまだ猫飼いとしてのキャリアも経験も浅いが、こと食に関して猫は個体差が大きい。飽きやすく同じ餌をすぐに食べなくなるのもいれば、「これしか食べ（られ）ない」とこだわり続けるのもいる。匂いなのか、歯触りなのか、嗜好（しこう）も千差万別だ。そのため、個体別のオーダーメイドにしたほうが食べてくれるし、健康について配慮しやすく、なによりコスパ*もいい。

「猫のための自炊」界隈もまた、奥が深い。私の研究室にいる大学院生のＲさんは、飼い猫の体重を計算し、薬学のⓐシュウシ号持ちであるという知識をⓑゾンビに用いて、猫のために半自炊している。肉は鶏肉が中心で、ササミなど低脂肪肉三三％、もも肉など脂肪を含む肉を二二％、心臓一四％、肝七％、砂肝三％。他にサワラやタラなどの生魚一〇％、貝肉（マンガンやヨウ素の摂取のため）四％、その他自由にササミ、心臓、砂肝、肝、生魚を様子を見て

増やす分で六％。その他、タウリン、食品グレードの炭酸カルシウム、ビタミン類（ＢとＥ）を足してできあがりだ。体重の他医療記録もきちんと記録されたエクセルファイルには、レシピの他に原材料の調達先も記録されている。Ｒさんによれば、ドライフードは猫の噛（か）む力を育ててくれるし、栄養補助剤を含むので、それと組み合わせるかたちでこのレシピのウェットフードをつくり、こだわりとコスパの両方を実現しているのだということだ。

［　i　］、これは猫のための「人間による自炊」であって、C「猫による自炊」ではない。昔、実家の周りをうろうろしていた野猫たちは、バッタ、ヤモリ、ネズミ、スズメ、ヒヨドリまで、見事に狩っていた。［　ii　］、人間のシステム内で生きる飼い猫には、狩りを含む自炊は不可能だ。窓の外の鳥に向かってクラッキング*し、廊下の暗がりから息を潜めて獲物を観察するようにこちらをじっと見つめ、跳ねるものを見ればうずうず尻を揺らした後に飛びかかる、ⓒという疑似的な（しかし野生性をまさにⓓハッキしているようにみえる）狩り行動をしていても、飼い猫という生きものは家畜化されている。繁殖、給餌、健康、そして個体としての幸福（well-being）のあり方は、人間のシステムに依存し、人間との関係性次第で大きく変わる。

［　iii　］家畜種である猫にとって食べることは、飼い主とその社会のシステムに大きく依存することだ。家畜化とは、庇護（ひご）され、依存するあくまで他者（飼い主）にコントロールされる非対称的な存在になることであり、生を他者により所有されていることである。そして、家畜化をしかける側から見れば相手を依存させること、しかけられる側から見れば依存させられるということだ。猫の個体としての自律も、自由を生きる主体であることも、所有されること、依存することのあいだにあって成り立っている。だからこそ、D非対称的なものへの配慮と世話、すなわちケアという責任が飼い主に生じる。

もっとも、猫のための「人間による自炊」には限界がある。紹介した院生のＲさんも、狩猟や家畜の飼育といったところから原材料の調達をしているわけではない。原材料を生産し、加工し、流通させてくれるシステムに依存している。Ｒさんの試みは、こうしたシステムに依存しきるのではなく、少しでも猫をケアする自分の裁量を増やそうとする試みだ。

同じことを私たち人間もいつも自分に対して、そして自分がケアすべき同種に対して試みている。システムの中に生きるからこそ、所有されること、依存することのあいだにあって成り立っている自律と自由のために、自分の裁量を増やそうと試みているのだ。E私たち人間は、動植物を飼い慣らす傍（かたわ）ら、自分たちもまた飼い慣らしてきた。自分たちが生み出した人工物に囲まれ、自然の驚異から自らを遠ざける居住空間をつくり、コンクリート空間に適応して生きる。食料など生活必需品は社会システムを介して手に入れることができ、狩猟に出かけることも栽培することもなく、既に高度に加工された食を受動的に享受することができる。生殖活動も身体の管理も私たちがつくった統治のなかにあり、誕生と死についても同様だ。健康や美容など、のぞましい生のありかたや身体のかたちを求めて、個体レベルでも、集団レベルでも操作性を高めようとしてきた。

こうした生活は、私たちが家畜化したものたちと類似している。曰（いわ）く、家畜化された生は人工環境の中に置かれ、食料は自動的に供給され、みずから獲得する必要はなく、所有者の財産として自然の驚異から遠ざけられ、人間により品種改良（人為淘汰（とうた））させられ、繁殖を管理され、家畜化により身体の

形は変えられる。動物学者の小原秀雄は、*コンラッド・ローレンツら先人の議論を踏まえつつ、家畜化された動物の生活とシステムの中の人間の共通点から人間の「自己家畜化」を論じた。哲学者の森岡正博は、さらに死のコントロールを受けること、そして家畜と人間の間に独特の共犯関係があり、自発的ですらあることもまた、現代社会の中の人間と共通していると指摘する。

森岡は人間が自らを家畜化する社会の姿を、「無痛文明」と呼ぶ。できるだけ苦痛を避けるのはもちろんのこと、苦痛があるかもしれないことを予防し、そうすることで無痛化する。そして、もしも苦痛があったとしても、みずからが置かれた状況から眼をそらし、なかったことにして生きることを多くの人々が選び取っているような社会の姿だ。森岡の無痛文明論は、政治学者の藤田省三が一九八五年に論じていたことと重なる。藤田は、不快の源となりうるものを根源的に一斉除去して、不快の欠如態としての社会に生きることを「安楽」とみなす現代社会のⓔフウチョウを捉え、こうした社会を求める心性を、「安楽」を求める全体主義と表現した。

森岡や藤田らの指摘は、社会が生命を資源化し続け、なおかつ*インフラ化している現在においてより重みを増している。スーパーに並ぶ切り身になった魚や美しい断面の肉はもちろん、美容に使われるプラセンタ（植物の*胎座からウマ、ブタ、そしてヒトの胎盤まで）、医療用のiPS細胞や臓器、食品や工業製品の材料となる細胞や微生物培養など、多様で多数の生命は私たちが用いる資源となって加工され、商品として社会に流通し、こうした生命を再生産し続ける仕組みは私たちの日常生活を支える下部構造になっている。上下水道というかたちで下部構造になった水がそうであるように、こうしてインフラ化したものたちは、私たちの日常の関心やまなざしの外におかれる。新しく造られるか、故障や破損など何か不具合があるか、あるいは撤去されるか、そうしたときには関心も集まり、そこにそのようなものがあると見えるようになる。そうでないときには、見えないことが正解になるのがインフラだ。問題がないようメンテナンスされ、常に不可視化され続ける。キャットフードが提供され続ける限り、スーパーの棚に卵や肉が並び続ける限り、それを支えるインフラ化した多数の生命に（あるいはそれらが生命であることにも）関心は向けられない。「安楽」であるためには、知れば苦痛を感じるだろうから、予防的に無関心であることが合理的だからだ。

「安楽」を求める全体主義は、リスクが中心になった社会と互いに支え合っている。私たちは、不可視化されたインフラをわざわざ見いだすより、もっと別のところに気を回し、関心をもつことに忙しい。私たちの日常は、選択の自由と市場での競争のなかにある。ゆえに、人生をまわすためのリスクを積極的に管理できる人間として、自律したプレイヤーとして選択に責任をもつことを求められる。プレイヤーとしてどこまでも主体的に、絶え間なく自分の能力と成果を証明し続ける社会において、その資源となる私たちの身体、心、生命を支える食は数多くの意味と役割をもつ場となる。食は、どこまでも個人的な行為でありながら、何よりも雄弁な、社会に向けた政治と表象の場でもあるから、誰とも共有しなくてよい束の間の自由を自分のために謳歌できる場でありながら、他者に向けて自律的で差異ある「私」をつくりあげ表現する場となる。

そのような現代社会において「自炊」とは、食がもつ多様な意味と役割を主体的に統制すること、Ｆ*セルフハンドリング（self-handling）であって、自分

で料理すること（self-cooking）ではない。素材を育て、時間をかけて出汁を引く丁寧な食事。忙しく働く日々、最も効率よく栄養をとりつつ味覚も充たす中食や惣菜を利用する食事。プロテインとビタミン補助食品でバランスをとる食事。それぞれの価値やその時々に変化するニーズや欲望によりかたちは変わっても、中心にあるのは、いかにセルフハンドリングしているか／できているか、ということだ。選択を迫る消費主義社会や、市場での競争に積極的に参与すべくリスクを管理するのか、あるいはそうしたものから離脱したところに価値をおき人生を立てようとするのか、いずれの立場であれ、どのように食をセルフハンドリングするかが「私らしさ」を表現する場となり、他者へ向けて自分を政治的に表象することとなる。

私たちは、自分という存在が、日常的に降りてくるさまざまな*イデオロギー（よく働き税を納める人間であれ、主体的に生きよ、個性豊かな人間であれ、ジェンダー二分法の中におさまっておけ……）のなかに埋め込まれ、私たちに気づかせないまま選択を構造化し限られたものにしているシステムのなかでしか生きられない。それゆえに所有されること、依存することのあいだで自分の裁量をどうにか増やすことを、自由と読み替えて生きているのだと知っている。そして、自分の裁量を増やそうと、Ｇ終わりなき主体化を続けるほかないことも直観的に知っている。その矛盾を引き受けつつ、「私」であることが自由であることと同義であることを信じ、そうあることを希望して自炊する。

（福永真弓「自炊と自己家畜化」による）

（注）
*ＱＯＬ＝クオリティ・オブ・ライフの略。生活の質。
*エビデンス＝証拠。
*グレインフリー＝穀物を使用しない。
*クラッキング＝猫が興奮状態で鳴き声を上げること。
*インフラ＝暮らしを支えるのに必要な基盤。
*セルフハンドリング＝自己統制。
*イデオロギー＝歴史的・社会的立場に基づく主義や主張。
*界隈＝共通の趣味や興味を持つ人々。
*視角＝物を見る角度。視点。
*コスパ＝コストパフォーマンスの略。費用対効果のこと。
*コンラッド・ローレンツ＝オーストリアの動物行動学者。一九〇三～一九八九年。
*胎座＝植物が受粉後に種を支える部分。
*中食＝弁当などを買って帰り家で食べること。

〔問1〕 二重傍線部ⓐ〜ⓔのカタカナは漢字に書き改め、漢字は読みをひらがなで記しなさい。（一点一画を正確に書くこと。） 記述

〔問2〕 空欄 i 〜 iii に当てはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 1

① [i もちろん　ii しかし　iii つまり]
② [i たしかに　ii そもそも　iii それゆえ]
③ [i ただし　ii 一方で　iii さて]
④ [i ところで　ii たとえば　iii したがって]
⑤ [i なるほど　ii そして　iii ところが]

〔問3〕 傍線部A「その『界隈』の奥深さ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 2

① キャットフードにこだわる猫飼いの中には、医科学・栄養学的な証拠に基づき、肉食動物にふさわしい良質な食材を選定して商品化しようとする向上心の高い人々もいるということ。
② 猫の食事を専門に研究する人々の中では、アレルギー源を突き止めるだけではなく、生活の質も保障されるよう医科学・栄養学的見地からさまざまな調査が行われているということ。
③ 虚弱体質の猫を飼う人々の間では、猫本来の力では捕食できない高い栄養価の食材を選定することにより、猫を正しい健康な姿へと導くよう、尋常ならざる熱意が注がれているということ。
④ アレルギー持ちの猫を飼う人々の間では、積み上げてきたデータに基づいて、猫らしさとは何かという問いについて徹底的に追求していく、並々ならぬ探究心の高さが見られるということ。
⑤ 餌にこだわる猫飼いの人々の間では、猫の生態をしっかりと把握した上で、医科学・栄養学的にも優れた食材や形態を選定することができるよう、日々熱心に追求が行われているということ。

〔問4〕 傍線部B「純粋化されながら再生産されている。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 3

① 多様な嗜好に合わせたキャットフードが次々と開発されていくと同時に、「猫なるもの」についての概念も多様化していくということ。
② 猫の生物学的特徴を追求したペットフードが開発されるごとに、種としての猫の概念がより一層強固なものになっていくということ。
③ 商品化される過程で猫の餌は一般化してしまうので、かえって個体差に合わせたオーダーメイドの餌の需要が高まっていくということ。
④ 猫という概念について追求していくと、結果的に、個体にあった餌の重要性にたどりつき、それが商品として流通していくということ。
⑤ 「猫らしさ」という概念にこだわって餌の開発を進めていくと、むしろ純粋な肉食動物としてのイメージにとらわれてしまうということ。

〔問5〕 傍線部C「『猫による自炊』ではない。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 4

① 飼い猫は結局のところ人間に依存して生きるほかない家畜であり、決して猫自ら食を管理しているわけではないということ。
② 猫はあくまで本能に基づいて狩猟行動をしている野生生物であり、料理のような人間的行動を取ることはできないということ。
③ 自炊を行っている主体はあくまで人間であり、人間は本来幸福に生きられるはずの飼い猫から可能性を奪い去っているということ。
④ 人間は猫を社会システムに組み込もうとしており、それゆえ人間からすると、飼い猫の狩りは自炊に感じられているだけだということ。
⑤ たとえ猫がすすんで自炊をしているように見えても、それは人間の思い込みであり、猫は本能のままに狩りをしているに過ぎないということ。

〔問6〕 傍線部D「非対称的なものへの配慮と世話」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 5

① 猫を完全な管理下に置くことの限界を飼い主が認識した上で、管理される側である猫の生活や安全を保障すること。
② 人間と猫の間にある支配関係を飼い主が認識した上で、弱い立場にある猫の健康や幸福がかなうよう努力すること。
③ 猫に依存する人間社会の矛盾を飼い主が認識した上で、本来は野生動物である猫の自由が守られるよう思いやること。
④ 人間は猫に餌を与える責任があると飼い主が認識した上で、猫の安全や幸福が維持されるよう適切なケアを続けること。
⑤ 生命を軽んじる人間の身勝手さを飼い主が認識した上で、人間の都合に振り回される猫が幸せに生きられるよう意識すること。

〔問7〕 傍線部E「私たち人間は、動植物を飼い慣らす傍ら、自分たちもまた飼い慣らしてきた。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 6

① 人間は、自然の驚異から遠ざけられている家畜のように、集団で協力し合いながら過酷な環境を作り変えてゆき、自然を支配してきたということ。

② 人間は、苦痛を避けたがる家畜のように、快適な生活が送れる人工環境を整えていくことで、科学技術に自発的に依存するようになってきたということ。

③ 人間は、繁殖や生死をコントロールされる家畜のように、システムにより常に管理されているが、それを仕方のないこととして受け入れてきたということ。

④ 人間は、システムの下で品種改良され繁殖を管理される家畜のように、自分たちの生き方や身体の形を望ましいものになるよう自ら変えてきたということ。

⑤ 人間は、管理しやすいよう身体の形を変えさせられる家畜のように、外部の圧力にさらされているが、それに抗(あらが)うことで自由を手に入れてきたということ。

〔問8〕 傍線部F「セルフハンドリング(self-handling)であって、自分で料理すること(self-cooking)ではない。」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 7

① 自律や責任が求められる現代では、一人一人がリスク管理をしながら、集団レベルでのシステム維持に努めなくてはならない。従って「自炊」とは、自己利益のためだけに行うものではなく、集団に利するための行為であるといえるから。

② 食材流通のために多数の生命が資源として使われ犠牲となる現代では、生命の価値がおとしめられている。従って「自炊」とは、単なる個人的な調理行為ではなく、こうした社会的な問題に対する政治的な表明を行うことであるといえるから。

③ 「安楽」を求める全体主義とリスクが中心になった社会が支え合う現代では、自由を手にいれることが難しい。それゆえに「自炊」とは、社会システムに縛られることなく、絶え間ない主体性を維持することのできる行為であるといえるから。

④ あらゆる苦痛に対し予防的に無関心を貫く現代では、自己の能力と成果にのみ関心が注がれている。それゆえに「自炊」とは、社会とつながるための行為ではなく、自己の存在意義を確かめ自分らしさを作りあげるための行為であるといえるから。

⑤ 選択の自由と市場競争を特徴とする現代では、選択に伴うリスクを制御する主体としての能力が求められる。従って「自炊」とは、単なる調理行為ではなく、社会における自らのあり方を表現できるよう主体的に自己を管理していく行為であるといえるから。

〔問9〕 傍線部G「そうあることを希望して自炊する。」とあるが、どういうことか。本文全体を踏まえた説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 8

① 私たちは家畜を所有し、資源として利用し続けることでしか生きられない。だがこうした社会システムに疑問を持ち、生命をインフラ化してしまう残酷な現実を食事の場で表現していくことによって、初めて人間は自由を獲得できると信じて、自炊を続けていきたいということ。

② 人間はまるで家畜のように、自らの生み出した社会に所有されているが、それにもかかわらず私たちは自分の裁量を増やすことが自由であると思い込もうとしてきた。この矛盾に気付き、いつの日か社会システムから解放されることを信じて、自炊を続けていきたいということ。

③ 社会システムに依存して生きる人間は、家畜のように限定的な自由を享受しているに過ぎない。この事実を受け入れた上で、自己を構成する資源としての食をどう手に入れるかを自己決定していく、その行為のなかに自由があるはずと信じて、自炊を続けていきたいということ。

④ 人間は家畜を所有することで、苦痛の存在しない安楽な社会を作り上げてきたが、それは生命を資源化し踏みにじる行為でもあった。こうした人間の傲慢さを自覚し、家畜に依存した食を続けるか否かを選択していくことこそが自由であると信じて、自炊を続けていきたいということ。

⑤ 常に選択を迫られる消費主義社会では、家畜の餌ひとつ用意する場合でも医科学的に正しい判断が求められる。リスクを可能な限り回避し、家畜に対する責任を持ちながら食生活を営むのは決して容易ではないが、その困難のなかに自由もまたあると信じて、自炊を続けていきたいということ。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

――高校二年の夏、火事に遭いひどい火傷を負った「俺」は、島根県に住む遠縁の剱田かがりという女性刀匠に引き取られている。（なお、本文中には島根県隠岐地方の方言がよく出てくる。）――

「……すみませんでした」

しばらく返答はなかった。でも何のことかは伝わったのだろう。

かがりさんは謝罪には応えず、代わりにこんな質問を口にする。

「あんた、何のために折り返し鍛錬すっかは理解しとっかえ？」

「鉄を鍛えているんですよね」

「まぁちぃと先を見据えっだ」

「ええと……刀の強靱さと、地鉄の美しさを出すため、ですかね」

「ん。ま、理屈の上ではそげなとこだらぁな」

三度スプリングハンマーが動き始めると、鉄が怒ったように真っ赤な火花を散らす。*鏨という道具で鉄に切り込みを入れて、文字通り折り返すように畳む。これを再び熱して叩き、折り返し面を鍛着させていく。弟子なんかいなくても、かがりさんの手が止まることはない。

鉄が火床に戻ったタイミングで、かがりさんが口を開く。

「*ほっだいど現代じゃ別の側面もあっだわ。要するに法の問題ってやつだわの。*玉鋼を使ったり、折り返し鍛錬をするといった、伝統的な技法で作られっもんだないと日本刀として認められず、登録証が発行されん。登録証がなけりゃ売買もできんけん、商売にならんだわ。身も蓋もねぇ話だと笑うかえ？」

A 俺はかぶりを振ったものの、内心では身も蓋もないと思っていた。

「ま、そげな説明したとこでカンナも納得しやせんかったわね」

なぜ、そこでカンナさんの名前が出るのだろう。かがりさんは苦笑いを浮かべている。

「戦争が終わった後、日本は*GHQの支配を受けたんだわ。そんときに武器は*ごっと取り上げられ、日本刀も例外だなかった。ほっだいどそっでも日本刀を後世に残していきたいと考えた当時ん人が色々奔走してね。元々日本刀には神器や美術品としての側面もあったけん、そげなもんとして残してごさ

んかと訴えたんだわ。幸運なことに当時ん米軍のある大佐が理解を示してくれて、そん糸が今に繋がっとる」

かがりさんの打つ鉄の塊に、細く、白霹のようにきらきら光る糸がついているのを想像する。i いや、この場所のあちこちに、その糸は繋がっているのだろう。

*金床にも、*向こう槌にも、火床にも、炭にだって。そしてなにより、かがりさん本人にも繋がっている。

俺には繋がっていない。繋がっているような人間なら、今、こんなにもやもやしていない。

「そげな経緯でかろうじて残ってきたもんだけん。*今ん日本刀ん在り方には歪みがあっとあたしも思っとるし、カンナが感じ取っとったもんも突き詰めるとそこなんだら。あんたも感じとんのかもしれんけどね。そっは、刀いうもんが辿ってきた歴史の歪みそのものだだわ」

B 水を向けられている、と思った。

かがりさんとカンナさんが、どこまで話をしたのかはわからない。それでも、俺が彼女に何かしらの引っかかりを覚えていることは、時系列を考えればそこまで想像に難いことではないのだろう。

「カンナさんって、*瑠璃川オサムさんの妹ですか？」

いざその質問をぶつけても、火床を見つめる真剣な横顔には、微塵の揺らぎもなかった。

「本人になんか聞いただか？」

「いえ。何も」

*ハンドタオルを返したときも、何も見なかったふりをした。

「そげかね」

かがりさんはまた鉄を取り出して、しばらく叩いていた。やがて作業が一段落したのか、鉄を*テコ台ごと金床に立てかけるようにして、ゆっくりこちらを向いてこう言った。

「あんたの推察通り、あの子の兄は瑠璃川オサムだわ」

名乗らない少女がかがりさんの下を訪ねてきたのは、瑠璃川オサムの死後数か月のことだったという。彼女はその当時、大学生だったが、突然現れた小柄な少女を見て、かがりさんもコウさんも当初は高校生かと思ったそうだ。

「よう晴れた夏の日だったわ。あの子はいきなりやってくるなり、なんで現代ん日本刀が斬れる必要があっだや言ってきた。美術品なら見栄えだけ整えればいいだら言って」

C 火床を片付けながら、かがりさんはぽつりと言った。

普通の人間は、法律にそこまで明るくない。だけど善悪の基準は持っている。この国で、銃や刀を持ってはいけないことを知っている。そういう法律があることを知っている。破れば罰せられることを、ある程度の歳になれば子供でも知っている。

だから多くの日本人が刀を見たときに抱く感情は、「美しい」よりも「怖い」が自然だと俺は思う。実際、俺もそう思ったし、たぶん今も思っている。

日本刀の美しさは、武器としての性能を高める中で、付随的に生まれる。端的に言えば〝 X の美〟というやつだ。かがりさんに教えてもらって、俺もその言葉は知っている。道具は使われてこそ美しい。その美的な側面と、武器としての性能的側面は表裏一体。あらゆる工程は美化であり強化。研ぎですら〝化粧研ぎ〟なんて言葉があるくらいで、刃を鋭く高めるだけでなく、その刃文や地鉄の美しさを引き出す工程でもあるのだ、と。

故に今の法律は、日本刀は武器（刀剣類）であるとした上で、美術品としての価値を例外的に認める形になっている。かがりさんが言うように、それは刀が長きにわたり戦乱の中を渡り歩いてきたという歴史と、美術品という現代の到達点――一見すると飛躍している、その特異な経緯によるものなのかもしれない。

「斬らん刀に斬れる力を与えたままにしとっことは、平和を第一に考えたら怠慢なんかもしれん。難しい問いだわよ。あたしだってはっきりした答え持っとるわけだない。だけん、そっを知りたいなら自分で作っしかないだらって言っただわ」

「だからカンナさんを弟子に？」

「いんや？　あたしはあの子を弟子に取っつもりはなかったわよ。そもそもコウが最後んつもりだったけんね」

その頃だってあたしゃ十分高齢だったんだわ、とかがりさんは自嘲気味に笑った。コウさんの独り立ちが、自身の引き際だとでも考えていたのだろうか。

「けど、どげでもって言って聞かんくてね。そのへんは調べとったんだらぁね。女のあたしんところを蹴られたら、他に行けっとこなんかないって。ま、そらそうだろうけども、事情があんのはお互い様だわね。お互い頑固だったけん、話は平行線だったわ。最終的には、あたしらの共通点が無理やり縁を結んじまったけども」

「……瑠璃川オサム」

「そげだわ」

最終的にかがりさんが折れたのは、彼女が自分の名を明かしたから。かがりさんとカンナさんに直接の繋がりはない。だけど二人の間には、刀を介して瑠璃川オサムという共通点があった。カンナさんの方はもちろん、最初からその縁を辿ってきたわけで、かがりさんからしてみれば丸腰だと思っていた相手に間合いに入られてから得物を見せられたようなものだったろう。

「あの子が瑠璃川オサムの妹だと名乗ったとき、色々腑に落ちたわよ。兄が死んだことで、どげでも釈然とせんことがあっけん訊きに来たんだと言っとった。犯人はすでに刑務所の中。あたしへの恨みはない言っとったけども、そげなふうには見えんかったわね。でもあの子んやり場んねぇ感情……あたしにはそっ

を受け取る義務があっとも思ったわ」

そのとき、かがりさんの顔は、いつになく皺が深くなったように見えた。

「あたしはそれ以降もそれまで通りに刀を打っとる。仕事のやり方は何一つ変えとらんだわ。そいでも、ちぃと思うとこもあったわね。あの刀はよう斬れたと思うけども、何ぞ足りとらんかったかもしれん。妖刀なんて言われとったことも知っとるよ。ま、言い返せんわな」

かがりさんはネットなんて見なそうだけど、仲間内で何か言われでもしたのだろうか。元々唯一と言われる女性刀匠、風当たりの強い世界で生きている人間は孤立しやすく、孤立した人間は攻撃されやすい。

それでもなお、前に進む活力にするのに、いったいどれほどの胆力が要るだろう。

「……見つかったんですか？」

俺が訊ねると、かがりさんはかぶりを振った。

「そげなもんはないのかもしれんわ。先行き短い老人にはちぃと過ぎた目標だったかもしれん。カンナの方も、まだ答えは見つかっとらんみたいだし。ま、見つからんかったらそんときはそんときだわね。後はわけもんに託すわ」

あたしが知っとんのはこげなとこだわ、とかがりさんはあっさり話を畳んだ。

カンナさんの過去。かがりさんの過去。俺にとっての火傷と同じように、二人の過去にも目に見えない傷がある。人の痛みを知ることは難しい。その傷が深ければ深いほど、簡単にわかったような顔をされるのも癪だし、かといって理解されない孤独もまた苦痛なのだ。

かがりさんの〝痛み〟に対する付き合い方は独特だ。自分を恨んでいるかもしれないカンナさんを受け入れ、心に火傷を負っていた俺に仕事を与え、自分の傷についてはなんでもなさそうにしゃべる。直接は触れない。でも、無関心というわけではないし、無視しているわけでもない。

その在り方は、どことなく白鞘のようだと思う。以前少しだけ教えてもらった、決して刀身には触れず、その通気性・吸湿性を以て刀身が錆びることのないよう保護する素木の鞘。本人に言ったところで、絶対に認めやしないのだろうけれど。

「……かがりさんは、どうして俺をここで働かせるんですか？」

「そっは自分で考えな」

笑いながら答える彼女は、きっとその答えにしたって、一生教えちゃくれないのだ。

ただ、今になってふと思うことがある。学校へ行かないなら働いて返せ――いつか言われたあの言葉は、少なくとも本質的にはお金の問題じゃなかったのかもしれないな、と。

「さ、話は済んだよ。今日はここまでにすっかね」

かがりさんが火床の前から立ち上がった瞬間だった。
ぐらり、と危なっかしくその体が傾いで、俺は慌てて手を伸ばした。よろけたかがりさんはすぐに体勢を立て直したものの、その体がほんの一瞬俺に寄りかかり、ぎくりとする。
かさかさの肌、火のそばにいたはずなのに妙にひんやりとした体、どことなく軽い感触……そうだ、この人は高齢者なんだ。わかっていたはずなのに、その事実になぜだか打ちのめされる。
「ごめんよ。あたしもいよいよ歳だわぁ、ほんとに」
かがりさんはなんでもなさそうに立ち去っていったが、G俺はしばらく、その場から立ち上がることができなかった。

（天沢夏月『青の刀匠』による）

（注）＊スプリングハンマー＝鍛冶に用いる、電動で動くハンマーのこと。
＊鏨＝金属を加工する工具。
＊ほっだいど＝そうだけれども。
＊玉鋼＝日本の古式製鉄法で作られる鋼の一種。
＊GHQ＝第二次世界大戦後、日本に置かれた連合国最高司令官の総司令部のこと。
＊ごっと＝すべて。
＊金床＝鍛冶に用いる、加熱した鉄を載せる作業台。
＊向こう鎚＝鍛冶で、主鍛冶の反対側に立っている助手が使う長柄の大鎚。また、それを使う人。
＊今ん日本刀ん＝今の日本刀の。
＊瑠璃川オサム＝かがりさんが打った日本刀で引き起こされた、無差別殺害事件の被害者。
＊ハンドタオルを返したときも＝「俺」は以前に、カンナさんの氏名が書いてあるハンドタオルを拾ったことがあった。
＊テコ台＝鍛冶に用いる、小割りされた鋼を積んで載せるための道具。
＊あっだや＝あったのか。
＊わけもん＝若者。

〔問1〕 波線部ア「かぶりを振った」・イ「風当たりの強い」の本文中における意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選んでマークしなさい。ア 9 ・イ 10

ア「かぶりを振った」
① 心の揺らぎをとっさに隠した。
② 同意する意向を全身で表した。
③ 否定の意志を身振りで示した。
④ 納得できない感情を態度に出した。
⑤ 高ぶる感情をそのまま行動に移した。

イ「風当たりの強い」
① 定評がある。
② 居心地のよい。
③ うわさが絶えない。
④ 雲行きがあやしい。
⑤ 激しい非難を受ける。

〔問2〕 空欄 X に当てはまる語を、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 11
① 刃
② 道
③ 和
④ 用
⑤ 芸

〔問3〕 傍線部A「内心では身も蓋もないと思っていた。」とあるが、この時の「俺」の心情として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 12

① 日本刀はこの先も売買されることでしかその強靱さと地鉄の美しさは認められないため、伝統的な技法を用いて折り返し鍛錬をすることにばかりこだわっていてはならないと、確信している。

② 日本刀で商売するために伝統的な技法を用いて折り返し鍛錬をしているのではなく、日本刀の強靱さと地鉄の美しさを出すためにそれをやっていることが現代では理解されず、戸惑っている。

③ 何のために伝統的な技法を用いて折り返し鍛錬をするのかについて話している最中も、かがりさんが日本刀を打ち続けている様子を見て、自分が弟子として認められていないことを痛感している。

④ こちらの謝罪に対して何の返答もしないことに不満を持っていたところへ、突然、日本刀を打つ過程で折り返し鍛錬をする理由を質問してきたことも重なって、かがりさんへの不信感が募っている。

⑤ 伝統的な技法を用いて折り返し鍛錬をしているのは、日本刀の強靱さと地鉄の美しさを出すためだけでなく、日本刀の売買に関する法律を守り生活していくためでもあることを知り、興ざめしている。

〔問4〕 傍線部B「水を向けられている、と思った。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 13

① かがりさんは日本刀の在り方についてカンナさんと「俺」が同じ考えを持っていると察し、二人の関係をここで確認しておくことが自分のためでもあると思っている。

② 「俺」がカンナさんの身の上について気になっているとかがりさんは勘づいていて、ここでそのことを話題にするようかがりさんに促されていると「俺」は感じている。

③ かがりさんは以前から「俺」とカンナさんの過去の事情について詳しく知っていて、「俺」はそのことを確かめておくためにここで質問しなければならないと考えている。

④ かがりさんはカンナさんと「俺」の関係についてすでに突き止めていて、そのことを匂わせるのではなく早く知らせてやらないと二人にとってよくないと想像している。

⑤ カンナさんは自分とかがりさんとの関係について「俺」が関心を持っていることに気づいていて、共に過去の傷を負っている「俺」からの質問には答えておくべきと推測している。

〔問5〕 傍線部C「かがりさんはぽつりと言った。」とあるが、この時の「かがりさん」の心情として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 14

① 当時はまだ高校生かと見間違えたカンナさんが突然やってきて、武器と美術品の両方の側面を持っている日本刀の在り方の歪みについて、その矛盾を堂々と指摘したことを思い出し、自分の至らなさを情けなく思っている。

② 日本刀はあくまで美術品であり、斬れる必要はないと考えているカンナさんが、武器としての性能を高めるからこそ日本刀の美しさが生まれるという考えには到底納得できないだろうと理解しており、やりきれなさを覚えている。

③ 日本刀で人を斬ることは想定してこなかったが、自分が打った日本刀で被害にあった人がいて、その妹であるカンナさんが直接会いにきたことを思い出し、日本刀の在り方について考えを改めなければならないと落ち込んでいる。

④ 日本刀に抱く感情は「美しい」よりも「怖い」とされているが、「俺」にとっての日本刀もやはり「怖い」ものだとしたらそれは受け入れ難いことで、「俺」のその気持ちを確かめたいと思う反面、確かめる勇気が出ず、気が弱っている。

⑤ 日本刀の美しさは武器としての性能を高める中で付随的に生まれるが、そのことを理解しようとせずに、日本刀はただ美術品として存在していればよく、斬れる必要はないと決めつける「俺」に、いくら説明しても無駄だと諦めている。

〔問6〕 傍線部D「事情があんのはお互い様だわね。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 15

① かがりさんは日本刀を打つ伝統を守りたい、カンナさんには同性のかがりさん以外に引き取り手はいないといった、弟子を取る、あるいは取ってほしい理由がそれぞれにあったということ。

② かがりさんはコウを最後の弟子と決め、カンナさんは日本刀を打つ伝統をここで絶ちたいといった、弟子を取る、あるいは取られることに関わるそれぞれの異なる理由があったということ。

③ かがりさんは高齢ゆえ引き際を考え、カンナさんには頼める人がかがりさんしかいないといった、弟子を取らない、あるいは取ってもらわなければ困る理由がそれぞれにあったということ。

④ かがりさんは武器としての日本刀が存在する意味を考えたい、カンナさんはかがりさんの高齢が心配になるといった、弟子を取り続ける、あるいは取られたい異なる理由がそれぞれにあったということ。

⑤ かがりさんは日本刀の武器としての性能を高めたい、カンナさんは美術品としての価値を高めたいといった、弟子を取る、あるいは取られるのもやむをえないそれぞれの異なる理由があったということ。

〔問7〕 傍線部E「かがりさんの顔は、いつになく皺が深くなったように見えた。」とあるが、この時の状況の説明として最も適切なものを次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 16

① カンナさんのやり場のない恨みや怒りを受け止めようとしているかがりさんの苦悩を、「俺」が見取っている。

② 自分の日本刀で人が死んだという事実を今も受容できずにいるかがりさんの苦しみに、「俺」が寄り添っている。

③ 事件に関わったことが世間に知れ渡り、そのせいで孤独を強いられたかがりさんの無念を、「俺」が想像している。

④ どうすることもできない問題と真剣に向き合って解決しようと努力するかがりさんの姿を、「俺」が見定めている。

⑤ 厳しい刀鍛冶の世界で、女性刀匠として長年生きてきたかがりさんの計り知れない苦労を、「俺」が思いやっている。

〔問8〕 傍線部F「……見つかったんですか？」とあるが、「かがりさん」が探しているものとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 17

① 伝統的に男社会である刀鍛冶の世界に、女性の自分があえて挑戦したことの価値。

② 決して他人に理解されることのない心の痛みに向き合っていくための、最善の方法。

③ コウさんを独り立ちさせる前にカンナさんを弟子に取ると決断した、矛盾の解消策。

④ 実際に斬ることのない日本刀を斬れる状態のままにしておく、という難問に対する答え。

⑤ 兄を殺されたカンナさんの過去と、人を傷つける刀を打った自分の過去が持っている意味。

〔問9〕 傍線部G「俺はしばらく、その場から立ち上がることができなかった。」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 18

① 「俺」が抱える問題にも、それとなく自分で解決するように仕向け、適度な距離を保ちながら見守っているかがりさんの人間としての深みを思い知らされるとともに、高齢であることを実感し、その存在のかけがえのなさに気づかされたから。

② 自分の仕事に対して最後まで責任を持ち、できないことは正直に認めて後進に託すという、かがりさんの誠実さに生きる勇気をもらえた一方で、弟子として認めてもらいたいという「俺」の願いは聞き入れてもらえなかった無念さも感じていたから。

③ かがりさんはこれまでに出会ったことのない人物で、自分のことを親身になって導いてくれるのを確信したが、高齢であることは否定できず、これからは自分が仕事と生活の両面でかがりさんを支えていかなければならないと決心させられたから。

④ カンナさんの過去を知り、その傷の深さを思いやって弟子に取ることを決めたかがりさんの優しさが理解できず、また高齢であることから今後も厳しい仕事を続けていくことができるのかどうか、体調面での不安をどうしても拭い切れなかったから。

⑤ カンナさんや「俺」が負った過去の傷を直接なぐさめるわけではないのに、知らず知らずのうちにその傷の痛みを取り除いてくれているかがりさんの不思議な力に驚かされながら、さらに、本人はそのことを決して認めない謙虚な人柄にも心ひかれたから。

〔問10〕 二重傍線部 i「いや」・ii「そう」・iii「もちろん」・iv「いったい」・v「ふと」とあるが、品詞の種類が異なるものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 19

① i「いや、この場所のあちこちに、その糸は繋がっているのだろう。」

② ii「実際、俺もそう思ったし、たぶん今も思っている。」

③ iii「カンナさんの方はもちろん、最初からその縁を辿ってきたわけで、」

④ iv「前に進む活力にするのに、いったいどれほどの胆力が要るだろう。」

⑤ v「ただ、今になってふと思うことがある。」

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔楚の荘王と申す人群臣をあつめてよもすがらあそび給ひけり。その御かたはらにあさからず思ひきこえさせ給ひつる后候ひ給ふを、人しれず「いかでか」と思ひたてまつれる臣下ありけり。ともし火の風にきえたりけるひまに后の御袖をとりて引きたりけるを、かぎりなく憤り深くやおぼしけん、御手をさしやりてこのおとこの冠の纓をとりて、「かかる事なん侍り。はやく火をともして纓なからん人をそれとしらせ給へ」と申し給ふを、あるじもとより人をあはれみなさけ深くおはしければ、「ともし火きえたる程に、これに侍る人々各々纓をとりてたてまつるべし。その後火はともすべし」とのたまはするに、このおとこ涙もこぼれてうれしくおぼえけり。かくてともし火あきらかなれど、誰もみな纓なかりければ、その人とみえざりけり。かかれども、この人「いかにしてかあるじのなさけを報ひたてまつらん」と心のうちに思へりけるに、あるじ敵のくににせめられて、あやうきほどにおはしけるを、この人ひとり身をすててたたかひければ、あるじかたせ給ひにけり。この事を思はずにあやしくおぼして、そのゆへをたづね問はせ給ふにこの人申していはく、「むかし后に纓をとられたてまつりて、思ひやるかたなくおぼえし時、誰となくまぎらはし給ひし事、我いまにわすれ侍らず」と泣く泣く申しけり。

なさけなきことの葉ならばけふまでも
露のいのちのかからましやは

あるじこれをきかせ給ふにも、「なほ人として［X］あるべき事にこそ」とおぼしけり。

（『唐物語』による）

（注）＊楚の荘王＝中国春秋時代の人。楚は国名。
＊あさからず思ひきこえさせ給ひつる＝楚の荘王が深く愛していらっしゃる。
＊纓＝冠の装飾具。
＊思はずに＝思いがけなく。
＊けふ＝今日。
＊御かたはらに＝お側に。
＊ひま＝間。
＊あるじ＝楚の荘王のこと。
＊ことの葉＝言葉。
＊きかせ給ふにも＝お聞きになって。

〔問1〕 波線部ア「よもすがら」・イ「やるかたなく」の本文中における意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選んでマークしなさい。ア［20］・イ［21］

ア「よもすがら」
① 至る所で
② 夜を徹して
③ 喜びいさんで
④ はめを外して
⑤ 世をはかなんで

イ「やるかたなく」
① どうしようもなく困って
② 理不尽なことに憤慨して
③ 思案に明け暮れてしまって
④ どうにかごまかそうとして
⑤ これ以上ないほどうれしくて

〔問2〕 傍線部A「いかでか」とあるが、誰がどうしたいと思ったのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。［22］

① 主君は群臣たちに、酒宴の席で愛する后をなんとしても披露したいと思ったということ。
② 臣下は主君が愛する后に対して、なんとかして自分の思いを遂げたいと思ったということ。
③ 群臣たちは主君が愛する后に、なんとかして自分のことを覚えてもらいたいと思ったということ。
④ 世間の人々は、主君が開こうとしていた酒宴の席になんとしてでも招かれたいと思ったということ。
⑤ 主君から愛されていた后は、臣下に寄せた密かな思いをなんとかして告げたいと思ったということ。

〔問3〕 傍線部B「かかる事」とは具体的にどのようなことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 23

① 主君が憤ったときに、臣下が后に袖をつかまれて注意を受けたこと。
② 酒宴が盛り上がったときに、臣下が后の袖をふざけてつかんだこと。
③ 臣下が酔っ払って自分の冠の纓を取ったときに、主君が激怒したこと。
④ ともし火が風で勢いを増したときに、后が臣下の冠の纓を奪ったこと。
⑤ ともし火が風で消えたときに、后が臣下に袖をつかまれて引っ張られたこと。

〔問4〕 傍線部C「うれしくおぼえけり。」について、なぜこう思ったのか。その理由の説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 24

① 自分が犯人とわからないように、とりはからってくれたから。
② 無実の罪を着せられないように、言いつくろってくれたから。
③ 風で消えてしまったともし火を、再びともすことができたから。
④ 密かに思いを寄せていた相手が、その思いに応えてくれたから。
⑤ ともし火がついたときに、その場にいる全員の纓がなく安心したから。

〔問5〕 傍線部D「この事」が指す内容として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 25

① 主君が深く愛していた后が、敵国に通じていて手引きをしたこと。
② 自身の国が急に敵国に攻められたのに、奇跡的に勝利できたこと。
③ 敵の国が突然攻めてきて、味方がだれも救援に来てくれなかったこと。
④ 戦で負けそうになったときに、臣下がひとり命をかけて戦ってくれたこと。
⑤ 臣下が戦を起こしてしまったけれども、主君がそれを解決してくれたこと。

〔問6〕 傍線部E「露のいのちのかからましやは」とあるが、ここではどのようなことを言っているのか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選んでマークしなさい。 26

① 后に対する私の思いは、今日まで続くことはなかったということ。
② 武人としての私の誇りは、酒宴の場で傷つけられていたということ。
③ 私は、今日まで生きながらえることはできなかっただろうということ。
④ 私は命をかけてでも、あなたをお守りしたいと思っていたということ。
⑤ 私の国の命運は、敵国に攻められたときに尽きていただろうということ。

〔問7〕 空欄 X に入る語として最も適切なものを、本文中より三文字で抜き出して書きなさい。 記述

問題の作成上、原文の一部を改変したところがある。